

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03010

研究課題名(和文) コンテキストへの依存と省略三段論法の許容度についての比較文化的研究

研究課題名(英文) A cross-cultural study of context dependency and the acceptability of abbreviated syllogisms.

研究代表者

山 祐嗣 (Yama, Hiroshi)

大阪公立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80202373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：高コンテキスト文化・低コンテキスト文化の区分の実証のために、日本、韓国、台湾、フランス、英国において実施された省略三段論法の受容の文化差(高コンテキスト文化においては、省略はコンテキストによって復元可能なので受け入れられやすい)を検討した研究は、本プロジェクトの中核である。省略三段論法の受容についての文化差は見られなかったが、相手が知っているものを省略しても良いかどうかについては、日本、韓国、フランスにおいて許容されやすかった。これは、言語における省略の影響と推察され、高コンテキスト文化特有のコードスイッチングである。これは、情報の受け手がどの程度コンテキストを共有度に応じてのスイッチである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニケーションのときのコンテキストの依存度が、東洋人において高く西洋人において低いという主張は、心理学的な比較文化実証研究はほとんどない。本研究は、高コンテキスト文化では、コンテキストで復元できるという意味で省略の許容度が高い点を検証したのだが、省略される事柄を相手が知っているかどうか、日本人、韓国人、フランス人が台湾人や英国人と比較して敏感であった。このコードスイッチングは、高コンテキスト文化の特徴だが、高コンテキスト文化の人々の異文化コミュニケーションに、重要な知見を与えている。

研究成果の概要(英文)：A study examining cultural differences in the acceptance of the ellipsis syllogism in Japan, Korea, Taiwan, France and the UK (ellipsis is more acceptable in high context cultures because it can be restored by context) to test the distinction between low-context cultures and high-context cultures is at the core of this project. No cultural differences were found in the acceptance of the ellipsis syllogism, but it was more acceptable in Japan, Korea and France to omit what the other person knows. This is inferred to be an effect of omission in language, a codeswitching specific to high-context cultures. This is a switch based on the degree to which the recipient of the information shares the context.

研究分野：認知心理学

キーワード：高コンテキスト文化・低コンテキスト文化 比較文化研究 省略三段論法 二重過程理論 弁証法的思考

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

Hall (1976) は、共有する背景知識 (コンテキスト) にコミュニケーション時にどの程度依存するのかについて、依存度が高い高コンテキスト文化、低い低コンテキスト文化という区分を行い、東洋人は前者、西洋人は後者にあたるとした。しかし、この主張について心理学の実証的な比較文化研究はほとんどない。そこで「省略」の許容度についての調査を行った。高コンテキスト文化では、コンテキストによる省略項目を復元可能なので、省略は許容されやすい。また、高コンテキスト文化では、相手とどの程度コンテキストを共有できているかによって、省略を調節するコードスイッチングも行われやすいとされる (Molinsky, 2007; Zakaria, 2017)。相手が知らない情報については、できるだけ省略しないというわけである。しかし、この点についての実証研究もほとんどない。

また、概して西洋人は低コンテキスト文化、東洋人は高コンテキスト文化と主張される。西洋人は個人主義文化、東洋人は集団主義文化とされており、低コンテキスト文化は個人主義文化の、高コンテキスト文化は集団主義文化の一側面とされているからである (Triandis, 1995)。しかし、この線引きは西洋・東洋間だけではない。多義語 (正確な解釈のためにコンテキストが必要) の多さや主語などの省略されやすさなど、使用される言語についても高コンテキスト・低コンテキストの区分について言及できる。日本語や韓国語は中国語よりも主語などの省略が多く、高コンテキスト文化を表す言語といえる。また、フランス語は英語よりも語彙が少なく、その分多義的であり、高コンテキスト文化の言語であるといえる (Meyer, 2014)。さらに中世のフランス語では主語の省略が見られたこともあり、その意味でも高コンテキスト文化の言語である。

この問題を解決するために、本研究では、「ソクラテスは人間である。したがってソクラテスは死ぬ」のような大前提を省略した省略三段論法の受容の度合いと、省略される大前提 (この例では、「すべての人間は死ぬ」) の熟知度を指標とする。高コンテキスト文化においては、コンテキストを使用して省略が復元されやすいので、省略が許容されやすい。また、熟知度が低ければ、省略しないというコードスイッチングが行われるので、高コンテキスト文化においては、熟知度に敏感になる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「ソクラテスは人間である。したがってソクラテスは死ぬ」のような大前提を省略した省略三段論法の受容と、大前提の熟知度 (コンテキストの共有) を省略のさいに考慮するか否かというコードスイッチングを指標として、低コンテキスト文化と高コンテキスト文化の区分について、日本人、韓国人、台湾人、フランス人、英国人を実験参加者として検証する。西洋・東洋という区分が重要なら、日本人、韓国人、台湾人が省略三段論法を受容し、コードスイッチングを行うことが予測され、言語的要因が重要ならば、日本人と韓国人、フランス人が三段論法を受容し、コードスイッチングを行うことが予測される。本研究の目的は、これらの予測を検証し、低コンテキスト文化・高コンテキスト文化という区分について、個人主義・集団主義という区分が妥当なのか、言語的要因が重要なのかを検討することである。

3. 研究の方法

上記の目的のために、大前提の熟知度が低い三段論法 (たとえば「消しゴムには硫黄が含まれている。これは消しゴムである。ゆえにこれには硫黄が含まれている」と高い三段論法 (たとえば「イルカは泳げる。これはイルカである。ゆえにこれは泳げる」) と省略三段論法 (たとえば「これは消しゴムである。ゆえにこれには硫黄が含まれている」とを刺激材料とした。日本人、韓国人、台湾人、フランス人、英国人の大学生を実験参加者として、三段論法と省略三段論法のどちらが適しているかについて判断を求めた。

実験は、大学の授業終了後に行われ、実験参加者は冊子に回答を記入した。また、実験1では、「イルカは泳げる。これはイルカである。ゆえにこれは泳げる」というモデュスポネズ形式の推論が用いられ、実験2では、「イルカは泳げる。これは泳げない。ゆえにこれはイルカではない」というモデュストレンズ形式の推論が用いられた。

4. 研究成果

省略三段論法の受容の文化差については、系統的な差として現れなかった。この受容については、さまざまな特殊要因あるいはそれぞれの文化特有の要因が関わっているのだろう。しかし、コードスイッチングについては、日本人、韓国人、フランス人がより多く行っていた。すなわち、彼らは、台湾人や英国人よりも、大前提の熟知度に敏感で、熟知度の効果が大きかったのである。ただし、このことから直ちに、日本、韓国、フランスが高コンテキスト文化の国で、台湾や英国が低コンテキスト文化の国であると結論できない。大前提の熟知度によるコードスイッチングは、使用言語の影響を受けやすかったと推定できるが、言語は、低コンテキスト文化・高コンテキスト文化の指標の一つに過ぎないからである。低コンテキスト文化・高コンテキスト文化という区分は、単一の次元ではなく、おそらくさまざまな要因が関わりあった複合的な次元で構成さ

れているのだろう。

なお、コードスイッチングについて、その後の私たちの研究 (Wu et al., 2024) では、異文化コミュニケーション時に行われていることが推定されている。この研究では、中国人も日本人も、相手国の人間が、コンテキスト依存度が低いと推論することが明らかになった。それぞれが、互いに相手国の人々とコミュニケーションを行うときに、お互いの文化背景を考慮してコードスイッチングを行い、日本人は中国人に対して、中国人は日本人に対して、コンテキスト依存を行わないようなコミュニケーションを行っているからだろう。

残された問題は、コードスイッチングが本当に高コンテキスト文化において用いられやすいかどうかである。Tomasello (2008) によれば、ヒトの言語の起源はジェスチャーにあり、多義的なジェスチャーを適切に解釈するためにはコンテキストが必要である。当時の自給自足的な部族社会は高コンテキスト文化であり、それは十分に可能だったようだ。そうすると、どのような条件下で低コンテキスト文化が生起するのかということ、文化背景を異にする人々同士のコミュニケーション、すなわち異文化コミュニケーション状況である (Ting-Toomey, 1999)。実際、私たち (Yama & Zakaria, 2019) は、高コンテキスト文化からどのような条件下で低コンテキスト文化が生起するのかについて、異文化コミュニケーションを軸としたモデルを提唱している。このように考えると、たとえば自給自足の部族社会において、確かに高コンテキスト文化が形成されているかもしれないが、コードスイッチングが起きているのかという問題が残される。日本にしろ、韓国、フランスにしろ、現代の国々では自給自足の部族社会はほとんど存在しない。異文化コミュニケーションは、必ずしも海外の人々とはなくても、たとえば、学校に通うようになったとき、あるいは就職のために故郷を離れたときにでも起きる。そういう意味で、現代では、高コンテキスト文化の人々も何らかの形で異文化コミュニケーションを経験し、その結果がコードスイッチング戦略なのではないかと推定できる。

グローバル化に伴って、さまざまな文化摩擦が生じているが、コードスイッチングは円滑な異文化コミュニケーションのカギとなる戦略である。コードスイッチングの研究は、低コンテキスト文化・高コンテキスト文化の理論的理解に重要であるとともに、グローバル化社会における実用的な研究であるといえるだろう。

引用文献

- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Anchor Books/Doubleday.
- Meyer, E. (2014). *The culture map: Breaking through the invisible boundaries of global business*. Public Affairs.
- Molinsky, A. (2007). Cross-cultural code-switching: The psychological challenges of adapting behavior in foreign cultural interactions. *Academy of Management Review*, 32(2), 622-640.
- Ting-Toomey, S. (1999). *Communicating across cultures*. Guilford Press.
- Tomasello, M. (2008). *Origins of human communication*. MIT Press.
- Triandis, H. C. (1995). *Individual and collectivism*. Westview Press.
- Wu, C., Yama, H., & Zakaria, N. (2024). How do Japanese and Chinese view each other? Understanding the meaning of low context culture in intercultural communication. *Global Networks*, 24(1), e12440.
- Yama, H., & Zakaria, N. (2019). Explanations for cultural differences in thinking: Easterners' dialectical thinking and Westerners' linear thinking. *Journal of Cognitive Psychology*, 31(4), 487-506.
- Zakaria, N. (2017). Emergent patterns of switching behaviors and intercultural communication styles of Global Virtual Teams during distributed decision making. *Journal of International Management*, 23(4), 350-366.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件／うち国際共著 5件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Bago, B., Yama, H. ほか	4. 巻 6
2. 論文標題 Situational factors shape moral judgements in the trolley dilemma in Eastern, Southern and Western countries in a culturally diverse sample.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nature Human Behaviour	6. 最初と最後の頁 880-895
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41562-022-01319-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 山祐嗣	4. 巻 29
2. 論文標題 二重過程理論：内省は直感を制御できるのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 343-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2022.031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yama, H., Galbraith, N., Baratgin, J., & Hashimoto, H.	4. 巻 13
2. 論文標題 Editorial: The role of culture in human thinking and reasoning	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2022.1018392	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Yama, H., Akita, M., & Kawasaki, T.	4. 巻 35
2. 論文標題 Hindsight bias in judgements of the predictability of flash floods: An experimental study for testimony at a court trial and legal decision making.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Applied Cognitive Psychology	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/acp.3797	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yama, H. & Zakaria, N.	4. 巻 31
2. 論文標題 Explanations for cultural differences in thinking: Easterners' dialectical thinking and Westerners' linear thinking	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Cognitive Psychology	6. 最初と最後の頁 487-506
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20445911.2019.1626862	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Nakamura, H., Shao, J., Baratgin, J., Over, D. E., Takahashi, T., & Yama, H.	4. 巻 9
2. 論文標題 Understanding conditionals in the East: A Replication study of Politzer et al. (2010) with Easterners.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2018.00505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 山祐嗣	4. 巻 16
2. 論文標題 インターナショナルスクールプログラムによる国際的発信力の支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪市立大学大学教育	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wu Changyi, Yama Hiroshi, Zakaria Norhayati	4. 巻 24
2. 論文標題 How do Japanese and Chinese view each other? Understanding the meaning of low context culture in intercultural communication	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Global Networks	6. 最初と最後の頁 e12440
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/glob.12440	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yama Hiroshi	4. 巻 1
2. 論文標題 Are Humans Moral Creatures? A Dual-Process Approach for Natural Experiments of History	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Human and Artificial Rationality	6. 最初と最後の頁 210 ~ 220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-031-55245-8_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yama, H.
2. 発表標題 Contemporary social fragmentation and political polarization: A dual-process approach.
3. 学会等名 International Conference: Human and Artificial Rationalities. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山祐嗣
2. 発表標題 人権意識の高まりと社会的分断・政治的二極化というパラドクス 二重過程アプローチ
3. 学会等名 日本理論心理学会第68回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 足立真太郎・山祐嗣
2. 発表標題 記述的社会規範が作為効果に及ぼす影響について.
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 呉長徳・山祐嗣
2. 発表標題 日本人と中国人は互いにどう認識するのか 異文化間コミュニケーションと低コンテクスト文化.
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中島裕人・山祐嗣
2. 発表標題 特定の感情がその後の判断の深さに与える影響について 説得におけるネガティブ感情とヒューリスティック傾向
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山祐嗣
2. 発表標題 思考の文化差 地勢的・生態的要因から文化多様性を考える
3. 学会等名 科学基礎論学会2021年度総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yama, H., Do, K. S., Galbraith, N., Zakaria, N., Salvano-Pardieu, V., & Chiu, M.
2. 発表標題 Cultural differences in preference for enthymemes: Cross-cultural studies of Japanese, Koreans, Taiwanese, French, and British.
3. 学会等名 9th International Conference on Thinking (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山祐嗣
2. 発表標題 理性は野生を飼いならすことができるのか 歴史的実験のすすめ
3. 学会等名 日本理論心理学会第66回大会(Web開催)理事会企画講演(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yama, H.
2. 発表標題 Perceptual hindsight bias after knowing flash floods: Causal relationship information between muddiness and flush flood.
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yama, H.
2. 発表標題 Hindsight bias in judgements of the predictability of flash floods: An experimental study for a court trial.
3. 学会等名 The 12th London Reasoning Workshop(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yama, H., Akita, M., & Kawasaki, T.
2. 発表標題 Hindsight bias in judgements of the predictability of flash floods: An experimental study for a court trial.
3. 学会等名 The 12th International Conference on Cognitive Science(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 繁枅算男(編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 232
3. 書名 心理学理論バトル	

1. 著者名 佐金・佐伯・高橋(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 274
3. 書名 ユーモア解体新書: 笑いをめぐる人間学の試み	

1. 著者名 高橋・山(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 児童心理学の進歩2020年版	

1. 著者名 山祐嗣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 192
3. 書名 「生きにくさ」はどこからくるのかー; 進化が生んだ二種類の精神システムとグローバル化	

1. 著者名 Yama, H. & Salvano-Pardieu, V. (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 IGI Global	5. 総ページ数 330
3. 書名 Adapting human thinking and moral reasoning in contemporary society.	

1. 著者名 河合優年他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 児童心理学の進歩2018年度版	

1. 著者名 繁樹算男(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 196
3. 書名 公認心理師の基礎と実践 心理学概論	

1. 著者名 頼偉寧・寺嶋正明・山 祐嗣(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 健康的存在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Niall Galbraith
<https://researchers.wlv.ac.uk/N.Galbraith/about>
Norhayati Zakaria
<https://www.uowdubai.ac.ae/teaching/faculties/business-finance-and-management/dr-norhayati-zakaria>
Veronique Salvano-Pardieu
<https://www.univ-orleans.fr/fr/ercae/veronique-salvano-pardieu>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------